

DALS ニュースレター No.12

死生学

東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

2006年1月10日

目次

巻頭エッセイ：新たなライフステージをどう生きるか

秋山 弘子

書評：若桑みどり『クアトロ・ラガッツィ』

前川 健一

研究会・シンポジウム報告

ジョン・ノース教授（UCL）死生学連続講義を終えて

市川 裕

シンポジウム「ケアと自己決定」報告

熊野 純彦

今後の予定

国際シンポジウム「死とその向う側」

多田 一臣

シンポジウム報告集『べてるに学ぶ 《おりていく》生き方』

『死生学研究』2005年秋号目次

「生命の哲学」プロジェクトの試み

森岡 正博

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

新たなライフステージをどう生きるか

秋山 弘子（本研究科教授・社会心理学）

日本は高齢社会の最先進国である。20世紀後半に平均寿命の30年延長という驚異的な寿命革命を達成し、いまや人口の5人にひとりが65歳以上の高齢者となったが、2020年には4人にひとり、2050年には3人にひとりと、今後もさらに高齢者の比率が増えると予測されている。そのなかでも、80歳以上の（私はこの言葉を好まないが）「後期高齢者」が急速に増加するという高齢者人口の高齢化の傾向が顕著である。

普通に生きれば20年近くを高齢者として生きる大衆高齢社会となった今日、私たちはいやおうなしに年をとったらどう生きるかを考え、大衆高齢社会における理想の高齢者像を目指して個人も社会も計画的に努力するようになった。私は仕事柄、お年寄りと話をする機会が多いし、高齢者を対象とする施策を協議する集まりにもでかける。そうしたところで、政策立案者やいわゆる意識の高い高齢者から「高齢者の自立」「社会貢献」「生涯現役」といった言葉が多発するのを耳にすると、いきいきと活動する高齢者の姿を思い浮かべてわくわくと同時に、それが私が30年近く生活したアメリカで観察した高齢者の苦悩する姿と重なって複雑な気持ちになる。

1980年代の終わり頃からアメリカでは、プロテスタント文化圏で人間の価値として重視される「自立」(independent)し、「生産的」(productive)であることを生涯継続する、つまり、中年期を人生の最後まで押し延ばすことを目標とする「サクセスフル・エイジング」のスローガンのもとに、高齢者政策ならびに医療福祉サービスが次々に展開された。高齢期においても健康で自立し社会に貢献できるということを前提にするサクセスフル・エイジング運動は高齢者の可能性を追求し、多くの不可能を可能に転換してきた。それと同時に、高齢者向け雑誌から補聴器や介護用品などの広告は極端に減少し、急傾斜の雪山をスキーで滑降する102歳の男性、マクドナルドで若い従業員と一緒にきびきびと働く93歳の女性、80歳で起業を決意した高齢青年などの写真が高齢者を代表するかのようにならなくなった。アメリカの高齢者団体であるアメリカ退職者連盟(AARP)は、その会員数、財力、政治的影響力において、アメリカの数多い団体の中でも最も強大な団体のひとつである。私はこの連盟の全国大会に何度か参加したが、近年、ずいぶん様子が変わって戸惑いを覚えたのは私だけでない。会場に入ると一瞬、レジャー産業の見本市かと錯覚した。そこには若々しく活動的な「中年」高齢者のイメージが溢れていた。長年高齢者のケアに携わってきた同行したベテランのソーシャルワーカーが、両手を広げ肩をすくめて溜息をついたのを覚えている。後期高齢者の急増する昨今、サクセスフル・エイジングのスローガンのもとに描かれる高齢者像が必ずしも現実を反映しないばかりか、健康で自立して社会に貢献することをサクセスフル・エイジングとする画一的な考え方は、さまざまな理由でそれを達成できない高齢者に失敗者という自覚をもたらし、多くの人達は人生の最終コースを失意のうちに歩むという問題が高齢者自身からも高齢者ケアの従事者からも指摘されるようになってきている。実際に、私の住んでいた町でも「自立して生産的である」ことをまるでイデオロギーのように信奉し、すべてのものを犠牲にしても自立は固守するという姿勢を示す高齢者が少なくなかった。そうした人たちの中には身体機能の衰えや収入の減少などにより、親族・友人・隣人とそれまでのように物をやりとりしたり、互いに助け合ったりすることができなくなると、一方的に援助を受ける依存（自立の放棄）を避けるために、関係から身を引いてしまう人もいた。周囲のサポートが最も必要な時に、人との結びつきを絶つことによって自立を守ることを選ぶのである。

私は決して、今や日本においても高齢者関連施策の柱となっている自立の促進・維持が誤っていると考えているわけではない。元気で活動的な高齢者がふえたことは大変喜ばしいことである。社会と個人、双方のニーズを鑑みると、今後も高齢者の自立促進の努力は継続・強化されるべき

であるし、実際、多くの高齢者が着々と自立を達成していくであろうと予測される。いろいろなシニア特典の資格をクリアする年齢に達した私自身もそうありたいと願っている。しかし、そのスローガンが20世紀後半の寿命革命によって私たちに与えられた後期高齢期という人生の新しいライフステージを、充実して幸せに尊厳をもって生きるうえでも有効な指針となりうるかは疑問である。高齢者が高い比率を占める超高齢社会で、この新たなライフステージをどう生きるか、高齢者自身も、家族も、高齢者政策立案者やサービス提供者も模索しているように思われる。これは死生学の課題でもある。

<書評>若桑みどり著『クアトロ・ラガッツィ 天正少年使節と世界帝国』(2005、集英社)

前川 健一(本 COE 特任研究員・仏教学)

クアトロ・ラガッツィ(quattro ragazzi) = 四人の少年とは、副題にある天正少年使節の四人である。彼ら 伊東マンショ祐益・千々岩ミゲル・原マルティーノ・中浦ジュリアン は、三人のキリシタン大名(大友宗麟・大村純忠・有馬晴信)の名代としてヨーロッパに赴き、スペインのフェリペ二世、フィレンツェのトスカーナ大公、教皇グレゴリウス十三世に謁見し、その後を襲ったシクストゥス五世の即位式に列席した。しかし、帰国後、彼らを待っていたのは、秀吉・家康と続くキリシタン禁制の日本であり、その中で、四人の運命は分かれていく(伊東マンショ=病死、千々岩ミゲル=棄教、原マルティーノ=マカオに追放、中浦ジュリアン=殉教)。

なぜ、彼らについて描くのか、なぜ若桑みどりが描くのか。それは、ある夜聞こえてきた一つの声から始まる。「東洋の女であるおまえにとって、西洋の男であるミケランジェロがなんだというのか?」「日本人として西洋と日本を結ぶことを研究したい。究極、この今の私と結びつくことを研究したい。そのテーマはいったいなにか」。この内面の声に導かれて、ローマにやってきた著者は、そこで天正少年使節についての多数の文書を見出す。そこから歴史が新たに見えてきた。そうしてできたのが本書である。

しかし、本書の冒頭を飾るのは、船乗りアルメイダの物語である。彼は外科医であり、アジア貿易によって一獲千金を狙う商人であった。その彼が、イエズス会に入会し、私財を投じて日本に最初の西洋風病院を建てることになる。ほぼ一章分を費やして語られる彼の生涯はキリスト教が何をもたらしたかを示している。それは、信仰による生の劇的な変化、そして「虐げられた者たち」(病人、貧者、おんなこども)の傍に寄り添うことである(筆者はここにキリシタン拡大の要因を見出している)。しかし、結果として、彼の病院は閉鎖されてしまう。「貧乏人と病人の集まり」を日本人は嫌い、布教への悪影響が懸念されたからである。ここには、日本の精神風土とキリスト教との葛藤が予示されている。

四人の少年たちの話に戻ると、キリシタン研究でスペイン語・ポルトガル語史料を利用するのは常道であるが、それに加えてイタリア語史料が駆使されていることが本書の大きな特徴である。これによって、少年使節が当時のヨーロッパ人にとってどれほど大きなイベントであったのかが詳細に描かれる。彼らは教皇の権威づけに利用され、「東方の三博士」の再来とされてしまう(おかげで、中浦ジュリアンは「病氣」という名目で欠席させられるはめになる。使節が三人でないといふと具合が悪いというためだけに)。

「彼らが人間としてすがたを見せてくるまで執拗に記録を読んだ」と著者は言う。その中でも意を用いて描かれているのは、ヴァリニャーノである。イエズス会東インド管区巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ、彼こそが日本布教の最大の立役者であり、天正少年使節の発案者でもある。巡察師とは、各地域の布教状況を監督する役職であるが、彼は日本の国情を考慮し、順応

主義的な布教方針を立てた。他の地域はともかく、「中国と日本は別だ」というのが彼の考えだった（中国ではマテオ・リッチらが彼の方針を具現することになる）。日本人は（中国人も）、ヨーロッパとは別の高度な文化を持った異教徒である、彼らの文化を理解し、それに順応しなければ布教は成功しない、というのが彼の認識であった。これは、当時のヨーロッパ人、さらには宣教師たちの中でも、異例の認識であった。著者はその背景として、ルネサンス的な人文主義的教養と、ヴァリニャーノがイタリア人であったことを挙げている。「新世界」の住民に征服者として臨んだポルトガル人やスペイン人には、ヨーロッパ中心主義的な発想を脱することが難しかったからである。著者は次のように結論づけている。「ヴァリニャーノの本質的な新しさ、それはふたつの文明の混合ではなく、融合にあった。つまり日本は西洋化されるのではなく、古い日本に固執するのではなく、両文化の融合の結果として、未知の、まったく新しい日本文化を作るのだという考えである」。

しかし、このヴァリニャーノの考えは、結局のところ、多くの宣教師には理解されなかった。日本の布教責任者であるコエリヨや、『日本史』で有名なフロイスですら、そうであった。まして、スペインの後援を得たフランシスコ会は、順応を妥協としか考えなかった。こうした布教観の違い（ひいては異文化をどうとらえるかという姿勢）が、やがて日本のキリスト教を窮地に追い込んでいくことになる。

日本の側から見ると、キリスト教の最盛期を現出したのは、織田信長の布教許可によるところが大きい。無神論者であった信長にとって、キリスト教の価値とは、古代以来の天皇や神仏の権威を相対化してくれること、そして宣教師たちが自らの勢威を世界に伝えてくれるところにあった。信長は単に日本一国の掌握を目指したのではなく、最終目標は中国を征服して大帝国を建設することにあり、その皇帝は信長自身であった。信長は、天皇（とそれにまつわる様々な権威）に挑戦し、その結果、滅亡した。

秀吉や家康は信長の轍は踏まなかった。しかし、それは天皇・公家、そして彼らの背後にある「神々」との妥協を意味した。天皇を無視した信長とは違い、秀吉や家康は朝廷から叙位されることによって自らの正統性を主張した。彼らのこの方向性は、キリシタン禁制と無縁ではない。キリスト教は「神国」日本にそぐわない「邪教」とされたのである（著者は、村井早苗の研究を援用し、最初のキリスト教禁教令を出したのが正親町天皇であることを重視している）。

著者は総括的に次のように述べている。「四人の悲劇はすなわち日本人の悲劇であった。日本は世界に背を向けて国を閉鎖し、個人の尊厳と思想の自由、そして信条の自由を戦いとった西欧近代世界に致命的な遅れをとったからである。[中浦]ジュリアンを閉じ込めた死の穴は、信条の自由の棺であった」

ここで言われている「信条の自由の棺」とは、単に近世においては転宗の自由がなかったといったレベルの話ではない。キリシタンが苛酷な弾圧の中で殉教していったのは、背教者として生き長らえるよりも、死後の天国に賭けたからだ。同じようなことは、一向一揆を起こした本願寺門徒にも言えるし、日蓮宗不受不施派についても言える。近世とは、このような現世を超越する宗教的理想を否定した時代であった、と言える。その空隙を埋めたのは、宗教的権威をまとった権力そのものであった（信長は総見寺を建立し自らを礼拝させたし、秀吉も家康も神として祀られた。近代の「現人神」については言わずもがな）。

天正少年使節が象徴するのは、ありえたかも知れない「もう一つの日本」である。彼らの挫折は、ヨーロッパと日本の出会いの挫折というだけでなく、日本における宗教の挫折でもあった。日本人の「無宗教」（阿満利磨）は、この時に始まったのである。

本書は、アルメイダの物語に始まり、中浦ジュリアンの死によって終わる。信仰によって新しい生を生きたアルメイダと、信仰を抱いて死んだジュリアン。本書の叙述は、もはや信仰によって生きることも、信仰のために死ぬこともない日本人の姿を逆照射している。

ジョン・ノース教授 (UCL) 死生学連続講義を終えて

市川 裕 (本研究科教授・宗教学)

ロンドン大学の J・ノース教授の連続講義は、2005 年 11 月 7～17 日にかけて、全 5 回行われた。総合テーマと各回の講義主題は以下の通りである。

総合テーマ：古代ローマ人の死生観とその変容

「共和政期の宗教伝統は、帝国成立に至る政争と対抗する新たな諸宗教運動の出現によって、いかに変容していったか」、これを全体テーマとして、古代ローマ人の死に対する考え方、祖先との関係、来世への憧憬という死生学の中心問題を探求することであった。5 回の講義内容は、それぞれ、古代ローマの政治体制と宗教制度との関係、代表的知識人の「宗教」に対する捉え方、国家祭儀の宗教的意味と政治との関わり、新興の宗教集団にみられる死後



の生命に対する新たな観念、そして最終回の講義は、特別講義として位置付けられ、死生観あるいは宗教に対する考え方がまさに変化するそのあり方を包括的に提示して問題提起を行ない、コメンテーターを交えた討論で締めくくられた。

今回は、すでに 1 年以上前から企画されたこともあり、ノース教授の現在の問題関心が包括的に提示される内容であった。しかも、各回とも異なるディシプリンと視点によって、共和政末期の宗教状況と死生観が多角的に分析され、ほとんど毎回、通説に対する批判と新たな解釈が提示されたため、極めて刺激的な講義となった。参加者は、40 名から 50 名で、本学と他大学から、教員、研究者、院生、学部生が参集し、毎回、質疑応答が十分行われたことも、幸いであった。なお、開催日程については、5 回とも、平日の夕方、主として 17 時からに設定したが、それが参加人数にどう影響したかはわからない。

今回の講義内容は、筆者の専門分野ではないため、試みに、日本語要旨を作成し当日配布することで、参加者の理解に資するよう心掛けた。これは、通訳を入れず、教授の迫力ある講演と語り口の流れが障害されないことを願い、また聴衆にそういう英語の講演の雰囲気を感じて欲しいからでもあった。そのため、教授には 10 月中にすべての原稿を送付してもらい、当該分野に関連の深い博士課程後期以上の若手研究者 5 名に作成を依頼し、各回に要旨を発表してもらった。この要旨は、講義当日だけでなく、あとになって講義内容を振り返る際にもたいへん役に立った。担当者は講義順に、石渡巧、秋山由加(学習院大)、三津間康幸、鈴木順、中西恭子の各氏であり、この場を借りて感謝の意を表したい。

各回の要約と印象を述べれば、

11 月 7 日(月)の“Priests and Law in Republican Rome”では、共和政中期のローマ国制においては、政治家が祭司を兼ねていたことから、祭司階層が政治の下位に位置していたとする通説に対して、政治と祭祀の相互依存関係があることが指摘された。

11 月 9 日(水)の“Cicero and Republican Divination”では、キケローの著作『占いについて』から、キケローは、祭司として元来維持すべき宗教体系を批判したという通説に対して、古き良き慣習を重視しそこから逸脱する当時の習俗を批判的に見ていたという解釈が提示されたが、参加者からは、その点への質問とコメントが集中した感があった。

11月11日(金)“Caesar at the Luperalia of 44 BCE”では、この元来建国の神話を再現した豊穡と浄化の儀礼に、カエサルの戴冠式をもくろんだとする当時の世評に対して、カエサル自身は、王ではなく、建国の英雄との結びつきを意図していたという見解が表明された。私は、これを聴きながら、過ぎ越し祭とイエス受難との結びつきを思った。

11月15日(火)“The Underground Basilica at the Porta Maggiore”では、従来の解釈がキリスト教的枠組みにとらわれていたことを指摘して、神話に発する美女の誘拐といったローマの伝統的な宗教観念や死生観の語彙を使いながら、新たな宗教観、死生観を創造しようとした集団がいたことの意義を重視した点が、鮮明な印象を残した。

11月17日(木)【特別講義】“Choice, Chance and Change in the History of Pagan Religions”では、帝政期に、従来知られた諸要素が結びついた結果、ローマ宗教に新たな変化が生まれようとする多元的状况が描写された。コメンテータのイスクラ・ゲンチェーヴァ教授は、3世紀のバルカンの状況との対比を提示して理解を助け、また新潟大の葛西康德教授は法制史的意義に言及され、ともにローマ宗教の議論の枠を大きく広げてくれた。

なお、今回の連続講義のうち、第4回講義は、機関誌『死生学研究』に邦訳されて掲載される予定である。また、その他の講義も、邦訳して出版する計画をお考えの向きもあり、関係者の方々に深く感謝する次第である。

最後に、本連続講義の開催にあたり、COE 研究員の方々には、滞在前の事務的なやり取りから当日の講演と配布資料の準備等に至るまで、大変お世話になったことに感謝したい。



シンポジウム「ケアと自己決定」報告

熊野 純彦(本研究科助教授・倫理学)

2005年11月26日に、医学部本館大講堂において、シンポジウム「ケアと自己決定」が開催された。21世紀COEプログラム「死生学の構築」と、文学部の「応用倫理教育プログラム」共催の公開シンポジウムとしては、三回目を数える。自己決定という問題は、COE主催のシンポジウム等で繰り返しかえしとり上げられてきた論点のひとつであり、今回のシンポジウムは、その中間総括という意味ももっている。

他方、「ケア」をめぐる諸問題は今日さまざまな場面で提起され、焦点化されているもののひとつである。自己決定という論点との絡みでいうなら、たとえば「障害者」「高齢者」、また「終末期医療」の当事者に視点を据えるとき、自己決定をめぐる論点とケアにかかわる諸問題とが切りはなしがたいことはあきらかであろう。そうした場面で問題となる「当事者」は一方では広義のケアを必要とするひとびとであり、他方、ケアは自己決定を支えるケアでなければならないと考えられるからである。ひとにはだれも、不慮の事故で障害とともに生きる可能性があり、ひとはみな老いて、それぞれに死を迎える、あるいは死へといたる生を生きることになるかぎりでは、

だれもが可能的な当事者である。またケアをたんに一方向的にとらえるのではなく、ケアする者、ケアされる者との関係において、またそれを取り囲む社会的・共同的なコンテキストから考える場合には、ひとはみなケアと自己決定をめぐる問題の潜在的な当事者にほかならない。

本シンポジウムはそのような問題関心から、今日、問題をめぐってもっとも活発に発言しつづけている論者5名をお迎えして開催された。発言順に、提題者の立岩真也氏（社会学／立命館大学）、川本隆史氏（社会倫理学・応用倫理学／本学教育学部）、清水哲郎氏（哲学・臨床倫理学／東北大学）、コメンテーターの鷲田清一氏（臨床哲学／大阪大学）、上野千鶴子氏（社会学／本学文学部）である。司会はCOE事業推進担当者の筆者が担当した。

立岩氏は「障害者運動の歴史から」という副題で、障害者運動に同伴しつづける過程で紡がれた氏の思考のエッセンスを語られた。わけでも最後に、「死にいたる微弱な生」をべつのかたちで受容し承認するという課題に言及されたのが印象的であった。川本氏は自分史から説きおこされながら、正義論研究から出発した氏が現在「ケア」と「自己決定」をめぐり、主として「高齢者介護」の問題場面を中心にどのようなスタンスをとろうとしているかを報告された。清水氏は「医療現場から」ケアと自己決定というテーマをそもそもどのようにとらえるかを、意思決定のプロセスにかんする「説明・同意モデル」に替わるべき「情報共有・合意モデル」の説明からはじめられ、コミュニケーションとケアを主題化する議論を展開された。

鷲田氏は共同的なものをめざすコミュニケーションに対してはむしろ差異を、independence に対してはかえって interdependence をあえて対置することで、議論の呼び水とされた。上野氏は

ケアの担い手は圧倒的に女性であるのに対して、ケアの語り手が多く男性であるという、ジェンダー的なアンバランスを指摘されたうえで、各論者への疑問点を整理され、また、そもそもこうしたシンポジウムはだれを「宛先」としたものであるか、という問題を提起された。

議論の詳細は、やがて刊行されるブックレットにゆずる。シンポジウムは、いつものことながら、COE事務職員、特別研究員の方々によるご尽力、今回はとくにまた、医学部職員の方一名のご協力で、大きな問題もなく終了したこののみを報告しておく。



今後の予定

国際シンポジウム「死とその向う側」

多田 一臣（本研究科教授・国文学）

前号のニュース・レターで、上記の国際会議の趣旨について記したが、このほど全体のプログラムの大要が決定したので、ご紹介申し上げます。この国際会議では、「死」の向こう側を身近に感じる文化のありかたについて、さまざまな角度から考えていく。今回は、とくにフランス極東学院およびトゥルーズ人類学センターの全面的な協力のもと、東アジアとヨーロッパに力点を置きつつ、世界各地の事例を参照することで、上記の問題について検討していきたい。

なお、本研究会議は、公開講演と四つのワークショップ（総合討議を含む）から構成される。以下にその詳細を記す。

2006年2月18日（土）

ワークショップA [進んで死を迎える] 9:30~12:15

報告

Marine CARRIN (CNRS (フランス国立学術研究所)、トゥルーズ人類学研究所)

「死んで半神となる インド、カラナ地方のブータ信仰」

小峯和明 (立教大学) 「死の向こう側 身体・イメージ・パロディ」

杉木恒彦 (東京大学) 「死兆、死の欺き、死のヨーガ」

コメンテーター

François LACHAUD (EFEO (フランス国立極東学院) 京都支部長)

司会

島藺進 (東京大学)

公開シンポジウム 14:00~17:30

基調講演

Franciscus VERELLEN (EFEO 院長) 「初期道教における治癒と救済」

Jean-Pierre ALBERT (EHESS (フランス国立社会科学高等研究院)、トゥルーズ人類学研究所

所長) 「ヨーロッパにおける殉教と自発死」

コメンテーター

塩川徹也 (東京大学)、古橋信孝 (武蔵大学)

司会

多田一臣 (東京大学)、Christophe MARQUET (INALCO (フランス国立東洋言語文化研究院))

2006年2月19日（日）

ワークショップB [非業の死を受け止める] 9:30~12:10

報告

池澤優 (東京大学) 「中国古代・中世における“非業の死”」

波平恵美子 (お茶の水女子大学) 「非業の死とその受容」

Valérie ROBIN (トゥルーズ・ルミラーユ大学、トゥルーズ人類学研究所)

「ペルー南アンデス地方における「悪しき死」」

コメンテーター

Anne BOUCHY (EFEO、トゥルーズ人類学研究所)

司会

François LACHAUD (EFEO 京都支部長)

ワークショップC [死者とともに生きる] 13:30~16:10

報告

Agnès FINE (EHESS、トゥルーズ人類学研究所)

「キリスト教社会における洗礼親と代子、現世と来世」

池上良正 (駒澤大学) 「日本における「死者の身近さ」をめぐって」

Claudine VASSAS (CNRS、トゥルーズ人類学研究所)

「ディブーク：旧ユダヤ社会における憑依の一形態」

コメンテーター

末木文美士 (東京大学)

司会

藤原克己 (東京大学)

ワークショップD 総合討議 16:30~18:30

司会

多田一臣 (東京大学)、Anne BOUCHY (EFEO、トゥルーズ人類学研究所)

会場は東京大学文学部法文2号館1番大教室です。同時通訳つきです。

皆さまのご来場をお待ちしております。

シンポジウム報告集『べてるに学ぶ 《おりていく》生き方』発刊！

目次

刊行の辞 (竹内整一)

シンポジウム趣旨文

べてるキャッチフレーズ集

「べてるの家」説明文

パネリスト紹介

早坂 潔 (べてるの家代表)

河崎 寛 (べてるの家爆発救援隊隊長)

渡辺 瑞穂 (べてるの家メンバー)

木林美枝子 (べてるの家メンバー)

川村 敏明 (浦河赤十字病院精神神経科部長)

向谷地生良 (北海道医療大学助教授、浦河赤十字病院ソーシャルワーカー)

伊藤恵理子 (浦河赤十字病院ソーシャルワーカー)

市野川容孝 (東京大学助教授)

田口ランディ (作家)

司会：上野千鶴子 (東京大学教授)

シンポジウム採録 (2004年11月5日、会場：東京大学医学部鉄門講堂)

ディスカッション

本プログラム機関誌『死生学研究』2005年秋号 発刊!

(論文)

- 池澤 優 「親の死は子の罪か? : 敦煌文書書儀類に見る死と礼と孝と」
西村 明 「「二様の死者」のはざままで : 岡正治における追悼と慰霊」
佐々木慎吾 「共同性と社会的記憶 : 社会システム理論の観点から」
土屋 敦 「胎児を可視化する少子化社会 : 「生長の家」における胎児の生命尊重運動
(プロ=ライフ運動)の軌跡(一九六〇年代-一九七〇年代)から」
仁平 典宏 「生-権力のたわみ : ホームレスの生の視点からみた死生学」
今村健一郎 「生命を破壊する権利をめくって : ジョン・ロックの奴隷論を手掛かりに」
池田 喬 「死後の世界 考 : 近現代ドイツ哲学の系譜から」
岸 貴介 「なぜクローン人間は許されないのか? : 我が国での法的規制の根拠の検討」
青柳 路子 「E・キューブラー=ロスの思想とその批判 : シャパンによる批判を手がかりに」
鈴木 健太 「死が苦であることについて」

国際シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」

- | | |
|---------------|-------------------------|
| 一ノ瀬 正樹 | 報告 |
| グレアム・ブリスト | 知識の限界 |
| コリン・ホーソン | 蓋然的推論の論理 |
| ドナルド・ギリース | 医療上の意思決定における主観的確率と客観的確率 |
| ティモシー・ウィリアムソン | 確率的な反明瞭性 |
| 麻生 享志 | 医療経済学の見方から : 情報・哲学・意思決定 |

(翻訳)

- ロジャー・クリスプ 「医療資源の配分、QALYs か徳か」
廣瀬 巖 「集計 (Aggregation)」

欧文レジュメ

「生命の哲学」プロジェクトの試み

森岡 正博（大阪府立大学教授・生命学）

死生学COEのプロジェクトは、どのような成果を生みだしていくのだろうか。どのような共同研究も、最初は雑多な知識や議論が飛び交うだけの祝祭的な場になりがちだ。やがて、その研究を自分のライフワークとして引き受けようとする実質的な研究グループができあがってくれば、その共同研究は成功したと言えるだろう。

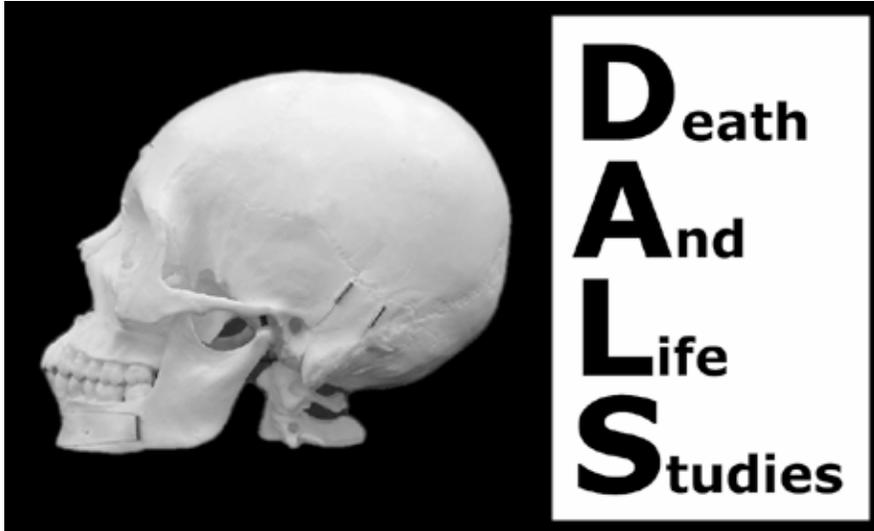
私は「生命学」という学際的な学問分野を一九八八年に提唱して、いままで何冊か本を書いてきた。生きとし生けるものが織りなす世界の中で、生命ある私がどのように生きればいいのか、そして社会の中でどのように他者と関わり合いながら生き死にすればいいのかを、ひとつの新しい形の実践学として構想しようとしたのだった。「生命学」は、自然科学の一形態としての「生命科学」とも異なるし、単にアカデミズムの内部で自足する学問とも異なる。その一端は、『無痛文明論』（トランスビュー）にて開示したが、まだまだ遠い道のりと言わねばならない。

私の言う「生命学」が、死生学と若干なりとも違おうとすれば、それは「生命学」が、科学技術文明全体の構造を問おうとするところであり、あるいは「死」に過剰に突出することなく生命世界を見ていこうとするところであるのかもしれない。もちろん死生学の今後の展開によっては、生命学と死生学の垣根というのは徐々になくなっていくのかもしれない。

ところで、私はいま、「生命学」のひとつの新たな試みとして、「生命の哲学 philosophy of life」プロジェクトというものを構想中である。「生命学」は生と死の実践学を目指しているが、この「生命の哲学」はどちらかというアカデミックな哲学的営為を中心になされることになる。類似学に「生命倫理学」があるが、生命倫理学は「善悪の判断」や「ルール作り」への寄与を使命づけられている。これに対して、「生命の哲学」は、それらの判断や思考の背景にあるところの、「生命」「死」「技術の介入の意味」「幸福」などについて、きわめて現代的な視座から哲学的な思索を深めていくのである。

「生命の哲学」は、生命倫理や環境問題、心のケア、介護の意味などの現代的な生命の諸問題が浮き彫りにしている「哲学的な問い」を正面から把握し、それにことばを与えるところから始まる。そしてその意味するところを思索する際に、伝統的な哲学・思想の蓄積から多くを学ぼうとする。生命の哲学においては、欧米だけではなく、アジア、イスラムなどの哲学からの寄与も巨大なものになるだろう。そして単なる伝統への回帰ではなく、未来に進むための哲学的思索を試みる。

このプロジェクトは当初から国際的な枠組みで行ないたい。「philosophy of life」という枠組みはまだ世界的にも成立していない。死生学COEを媒介して、このプロジェクトに形を与えることができればうれしいと思う。



「DALs ニュースレター」

第12号

平成18年1月10日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

21世紀COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”

責任者 島蘭 進

TEL & FAX 03-5841-3736